

エクスパート

映画の中の精神医学

小澤 寛樹

かつて東京・山手線の各駅に「ドモリ、赤面治しませ」という看板があったのを記憶しています。今回はそのドモリ、吃音(きつおん)症をテーマにしたアカデミー賞作品「英国王のスピーチ」です。

現英国女王エリザベス2世の父、ヨーク公(コリン・ファース)は幼いころから吃音障害に悩まされてきました。見かねた妻エリザベス(ヘレナ・ボナム・カーター)がオーストラリア人の言語矯正専門家(ジェフリー・ラッシュ)に依頼し、型破りな治療法が始まります。

吃音症を描いた

「英国王のスピーチ」(2010)



「英国王のスピーチ」のDVDジャケット(ハピネットから販売中)

巡ってきます。第2次世界大戦に向かう不穏な空気の中、国民は王の力強い「スピーチ」を求めています。吃音という3代目エリザベス、今の国歌師匠の落語を思い出します。彼は自身の吃音を治すために国鉄職員から落語家になる決意をしたそうです。

実は吃音だった小学校の同級生の口まねをしていて、自分もなってしまうのだとか。その同級生というのが後にアナウンサーとなる小川宏さん。生来の吃音の人であれば後天的になる人もいますが、克服する

中で言葉のエキスパートになる場合もあるのです。吃音の原因としては遺伝的、精神的要因に生活環境の影響などが考えられています。映画では、ヨーク公が幼少のころのつらい体験を告白する場面があり、ストレスとの関連性が示唆されています。

最近、精神医学の領域で「レソリエンス」という言葉を使います。困難な状況に適應できる力、挫折から復元する弾力性といった意味です。多くの患者は病気になる前に戻りたいと希望します。でも病氣からの回復とは単に元に戻るのではなく、苦勞を経てより柔軟な力、強い力を獲得すること

複合要因で後天的に発生も

となのかもしれない。

映画では患者と治療者の強い絆も描かれていました。不安障害を治療するに当たり、私が気を付けていることを少し紹介します。

①病名を患者と共有する。とても重要なことです。診断をつけ、病名を医療者と患者が共有し、「治療同盟」の構築を目指します。

②薬物療法を検討する。現代は有効な薬があります。標的となる症状は何か、どんな副作用があるのかを患者、家族に説明し、理解を得て治療を進めます。

③薬物以外の対処法を計画する。映画ではさまざまな工夫

を試みていました。今では誰でもできるリラクゼーションや腹式呼吸、認知行動療法、自律訓練法、暴露療法などがあります。対処法が載った本を紹介する場合は、治療者自身が実演して指導します。上から目線ではなく、水平の視点を持った対応が有効です。

④患者の自己対処に注目する。小さくても症状や疾患への認知面に変化が出てきたら褒めます。治療により患者が医薬品依存症に移行する事態を常に念頭に置き、注意を促します。映画で、強いお酒でリラクゼーション場面は気になりました。

⑤周囲の協力を仰ぐ。患者の家族や職場に説明が可能なら、よりよい治療を行うための絶好の機会です。

周囲の人のむやみな励まし、腫れ物に触るような過剰な配慮により患者の症状が動揺することは多々あります。映画でのエリザベスの態度はいい距離感がありました。

映画でも治療者が自分の不安に向き合い、患者に謝罪する場面があります。不安障害の治療はある程度の期間を要し、見通しに沿わないこともしばしばです。症状が改善しないことを患者や家族のせいにして、薬剤を性急に増やしたりしていないか、常に戒めることが重要です。

長崎大精神神経科学教室のホームページのアドレスは、<http://www.med.nagasaki-u.ac.jp/psychtry/>